

# ヴィクトリア朝のユダヤ人像

## ——ステレオタイプの成り立ち——

松 村 昌 家

### (1) ユダヤ人フェイギン

ヴィクトリア朝文学の世界にユダヤ人として描かれて不朽の名をとどめている人物をあげるとすれば、まずフェイギンの名が浮かんでくるであろう。

フェイギンはチャールズ・ディケンズの『オリヴァー・トウィスト』(1837-38)に、  
悪の世界を支配する、「暗黒界の君主」<sup>プリンス・オブ・ダークネス</sup>的人物として登場し、作品全体の緊張感を支える重要な役割を演じている。腕っぷしの強い、暴力の固まりのようなビル・サイクスでさえ、彼の前では思わずひるんでしまうほどである。まるで悪魔のように、抗い難い恐ろしさをそなえた老人なのである。

事実、ディケンズが悪魔のイメージを念頭において、フェイギンを描いたことは、例えば、エドウィン・ピューやローリアト・レイン(2世)などによって、早くから指摘されているとおりだ。彼は皺だらけの陰悪な人相の顔と、もつれた赤ひげを垂らした老ユダヤ人として、最初に私たちの前に姿を現すが、この赤ひげが一つの象徴的な意味を持っていることに注目しよう。モンタギュー・フランク・モダーの『イギリス文学におけるユダヤ人』(1944)にも述べられているように、赤ひげは、ユダヤ人の特徴として描かれるようになる前に、中世の舞台で、悪魔がつける一つの小道具となっていたのである。<sup>1)</sup>

そして、その点ではディケンズが彼を「老紳士」あるいは「陽気な老紳士」と名づけているのにも注意を向ける必要がある。シェクスピアの『リア王』にあるように、「老紳士」は、先にあげた「暗黒界の君主」と同じく悪魔を意味する婉曲語であったし、エドウィン・ピューによれば、そのユーフェミズムは、19世紀を過ぎて20世紀に入ってから、用いられていたということである。

『オリヴァー・トウィスト』第8章におけるフェイギン登場の場面の描写で、もう一つ見落としてならないのは、干し物掛けにたくさんの絹のハンカチがかけられており、彼がそれに少なからぬ注意を払っている様子が描かれていることである。これらの絹の

ハンカチに払われる彼の注意が何を意味するのかは、次に夢うつつの状態のオリヴァー・トゥイストの前に展開される驚くべき光景によって、次第に判明してくる。つまりフェイギンは隠してあった秘密の小箱から、何個もの金時計や指輪、ブレスレットなど、いろいろな宝石・貴金属類を取り出し、満面に喜色を浮かべながら熱心に見入るのである。

この場面はきわめて印象深い。フェイギンが住んでいるのは、サフロン・ヒルの路地の奥、セント・ジャイルズと並んで、「ルッカリー」（みやまがらすの群れ）の異名をもつ貧民長屋の一軒だ。むさ苦しいことこの上ない巢窟の中で、眼もくらまんばかりのこれらの宝石・貴金属の輝きは、まさに幻想的なまでに異様である。が、これらの品々は、すべてが盗品であることが、フェイギンの独り言を通じて明らかにされるのである。干し物掛けにかかっている絹のハンカチも、もちろん盗品——手下の少年掏摸団がすすてきたものである。ディケンズは悪魔の狡知と陰険さをもって、盗品故買を生業とする一方で少年掏摸を育成し、自己の利害に徹した極悪非道の人間として、フェイギンという人物をつくり出しているのである。

このことが、『オリヴァー・トゥイスト』が刊行されてから25年のちに、ちょっとした波紋を引き起こすことになる。

1863年6月、ディケンズは、彼が住んでいたタヴィストック・ハウスの借家権を譲り渡したユダヤ人事務弁護士、J. P. デイヴィスの夫人イライザから22日付の一通の手紙を受け取った。イライザ・デイヴィスがディケンズあての手紙を書いた直接の動機は、被抑圧民族救済に尽力した、ある女性活動家を顕彰するための募金を依頼することであったが、そこには殺し文句ともいえそうな、次のような文章が添えられていた。

広い心をもち、作品を通じて抑圧を受けているイギリス人のために雄弁に、そして高潔に訴えつづけているチャールズ・ディケンズが、（中略）軽蔑の対象となっているヘブライ民族に対し、悪意と偏見を煽るようなことをなさったと言われております。

（中略）

フェイギンについては、一つの片寄った見方しか成り立たないのだと、わたしは思います。でもチャールズ・ディケンズには生きておられるあいだに作者として、分散しているとはいえ、一つにつながっている民族に及ぼした重大な間違いに関して、弁明ないしは償いをしていただけるものと存じます。

小説家としてのディケンズの困惑が想像できるような文面だが、彼は作家という立場を離れて、デイヴィス夫人の言い分にも十分に耳を傾ける度量と現実感覚をもった人間であった。1864年5月から65年11月にかけて、分冊月刊された『共通の友』には、ライア

という善良で高潔な気質の老ユダヤ人を登場させ、デイヴィス夫人あての手紙には、「(心情的にはいつもそうであったように) ユダヤ人たちは最も良き友でありたい」(1864年11月16日付) ことを伝えて、彼女の苦言に答えているのである。

しかし、だからといって、ディケンズがフェイギンを描いたことに対して、後悔したり心を痛めたと思うのは、間違いである。彼はデイヴィス夫人からの第1 信を受け取ったあと、1863年7月10日付でそれに対する返信を書いたなかで、彼の創作に関してきわめて重要なことを述べている。『オリヴァー・トゥイスト』のフェイギンがユダヤ人として描かれているのは、ほかでもありません。不幸にして、その物語と関係のある時代のなかでは、あの種の犯罪者は、ほとんど例外なくユダヤ人であったという事実があったからです。」

ここにいう「あの種の犯罪者」(that class of criminal) が具体的に何をさすのか、この手紙には述べられていないが、基本的には盗みと盗品の故買を意味していることは、間違いない。そしてそのような犯罪は、ロンドンにおけるユダヤ人の生活が、歴史的に古着商と結びついていたというのと、密接な関係がある。

## (2) 〈オー・クロ!〉とスロップ・トレード

ロンドンのユダヤ人による古着商は、イースト・エンドのペティコート・レインを拠点としてはじまった。それがいつの頃からはじまったのかは定かでないが、18世紀初頭にはすでに、ロンドンの街々にユダヤ人古着商人たちの「オー・クロ!」(“O' Clo!”= Old Clothes!) という単調な叫び声が聞こえていたようである。おそらくはユダヤ人に対する反感や偏見とも関わることなので、彼ら古着商人の独特のスタイルについてもふれておく必要があろう。

もちろん品物を入れる大きな袋は不可欠だが、特に際立ったのは、裾のだぶついたフロック・コートと頭に乘せた三重の帽子と手にもった一箇の帽子、そして肩まで垂れさがった毛髪と長いひげであった(図1)。この格好は、その異様さゆえに長いあいだにわたって一種の固定観念と化し、あとから述べるように、風刺画専門の週刊誌『パンチ』などではユダヤ人そのものの表象として、一つのステレオタイプを形づくるようになる。

もともと根強い反感があったところへ、怪しげな格好のユダヤ人古着商人がロンドンの街を隈なく歩きまわるようになった。ヘンリー・メイヒューの『ロンドンの労働とロンドンの貧民』(1861-62) 第2巻「街頭のユダヤ人」の項によると、あるときにはその数は千人にもものぼったという。彼らに対する偏見が増幅された原因を、このような状況を通じて想像することができるのである。



"O'Clo !"

図1 *London Cries*.

ユダヤ人に対する偏見の種類はさまざまだが、特に古着商に関する偏見が生じた背景には、二つの主因が考えられる。一つは、彼らは、ことのほか金銭に対する執着心が強かったこと。これはユダヤ商人にとって伝統的なことで、シェクスピアの『ヴェニスの商人』のモチーフにもなった。そして第二は、「古着商人の中には、盗品であることがはっきり判るような値段で品物を買う者もいた」ということ、である。

今の引用は、ヘンリー・メイヒューが『モーニング・クロニクル』に寄せた第14信(1849年12月4日)によるものだが、ついでに、これにつづく一文も訳出しておこう。「しかしながら、〔品物の出所に関して〕問答はいっさいしないということ、品物をできるだけ安く買い取るということが、彼らの規則であった。」

冷静な記者としてのメイヒューのこのような客観的な書き方を、例えばロバート・サウジーが『イギリス通信』第63信<sup>2)</sup>においてユダヤ人について書いている、次のような文章とを比較してみよう。「この〔下層の〕ユダヤ人たちの表向きの主な仕事は古着商であるが、同時に盗品の故買も行っている。またにせ金づくりも稀ではない。」

文章の上でのニュアンスの違いには、当然ユダヤ人に対する考え方や感情のもち方の違いに通ずるであろう。考え方や感情のもち方は、さらに想像力の働きとも関わってくるはずである。そこで今度は、もう一度ディケンズの方へ眼を向けて、『ボスのスケッチ集』「情景編」第6章の「モンマス街の冥想」におけるユダヤ人古着商に対する彼の感情のあらわし方を見てみることにしよう。

「モンマス街の冥想」は、若き日のディケンズが書いたロンドンの古着商店街ファンタジーともいべき名小品だが、その冒頭で彼は、モンマス街に対して懐く好感とは対照的に、ホリーウェルのユダヤ人古着商店街に対しては、あからさまに嫌悪感をぶちまけている。「ホリーウェル街は嫌いだ。赤い髪と赤い頬ひげのユダヤ人どもが、誰かなくひどく汚れた家の中へ引っ張りこんで、無理やりに古着の中へ押しこむのを見ると、本当に嫌悪を催す。」

ディケンズの想像力の奥深さを考えれば、このようなユダヤ人古着商に対する徹底した嫌悪感が、フェイギンという人物の創造につながったことは、十分に考えられる。エドウィン・ピューが『チャールズ・ディケンズの原型』において、アイキー・ソロモンズという名だたるユダヤ人故買人がフェイギンのモデルとなったという説を立てて以来、いくつかの賛否両論がつづいたが、もっと基本的には、ユダヤ人古着商人に対して、彼の嫌悪感は、彼の想像力の中で、悪魔的なイメージをつくり出していたのだと考えるべきであろう。あたかも P. B. シェリーが『ピーターベル三世』（1819）において、イースト・エンド、ウォッシングの「スロップ・マーチャント」を、悪魔と重ね合わせているのと同じである。<sup>3)</sup>

「スロップ・マーチャント」というのは、安物既製服（この場合は主として船員用）製造業者のことで、以下述べるように、イースト・エンドにおけるこの業界を牛耳っているのは、ほとんどが古着商上がりのユダヤ人であった。シェリーがユダヤ人スロップ・マーチャントに悪魔のイメージを見たとするならば、それはちょうどディケンズが、フェイギンを「老紳士」（＝「暗黒界の君主」＝悪魔）として描き出しているのと同じである。

先に言ったように、いつときは千人にも及んだロンドンのユダヤ人古着商人が、19世紀半ば頃までには約半数にまで減ったというのは、彼らのあいだにおける商売のシステムが変わったからである。

1830年代における鉄道時代の到来とともに始まった流通機構の変革に伴い、ユダヤ人社会でも、新しく活気を帯びはじめた都市産業の市場に参入する傾向が高まった。そして新しく商人や製造業者のコミュニティが形成されると同時に、呼び売り行商人や雑貨商人たちは、商店経営や製造業、商取引に転職する方向へ眼を向けるようになったのである。といっても、もちろん無限の可能性があったのではない。彼らが進出できる製造・販売のセクターは、衣類、履物、果物中心の食品、宝石と時計製造、家具、タバコ（特に葉巻き）といった業種に限られていた。

そういったなかで、ユダヤ人実業家の創設になるとびきり大規模な衣服仕立業者が、ロンドンとマンチェスターを拠点として誕生した。モーゼズ父子商会と、ハイヤム兄弟商会で、ともに1832年に開業、古着に代わるものとして既製服を安い値段で一般労働者

に供給することをねらった企業であった。すなわち先に言った「スロップ」産業のはじまりだが、以後彼らは労働者に対して極力賃金を抑え、暴利を貪る悪徳商人として世間の注目を集めることになる。そして既製服仕立業は苦汁労働制度を代表し、両者は同義語と見なされるようになるのである。

そこで今度は、モーゼズ父子商会に対する偏見をむき出しにしたような風刺画を、一つ選び出してみることにしよう（図2）。ジョン・リーチがモーゼズ父子商会の紋章として描いたもので、1844年11月23日付の『パンチ』に掲載された。一見してわかるように、資本家にのし上がって得意満面のモーゼズ父子と、奴隷のように働かされて貧困のどん底に陥っている苦汁労働者のコントラストを描いている。上半分が回転式になっているのは、上下の差——すなわち、搾取による上下の落差がますますひどくなる可能性のあることを示唆する。

この絵には「パンチの評言」という見出しのついた説明文が添えられているが、その中で最も注目すべき点は、先にフェイギンとの関連でふれておいたアイキー・ソロモンズが引き合いに出されていることだ。「もしわれわれの記憶に間違いがなければ、アイキー・ソロモンズは、名前を頻繁に変えた。モーゼズ父子もちろん思いのままにそれ

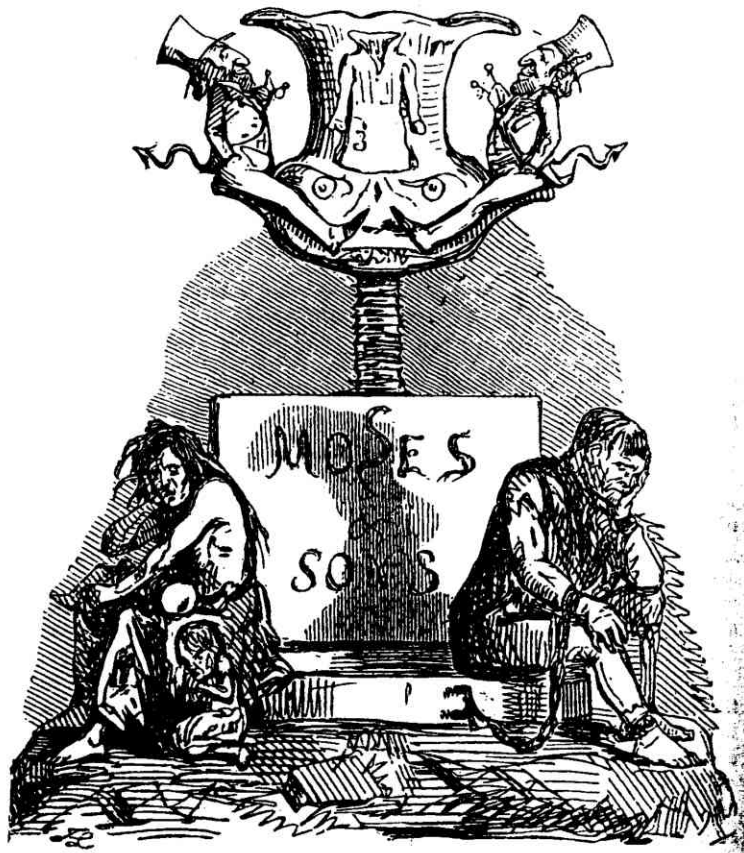


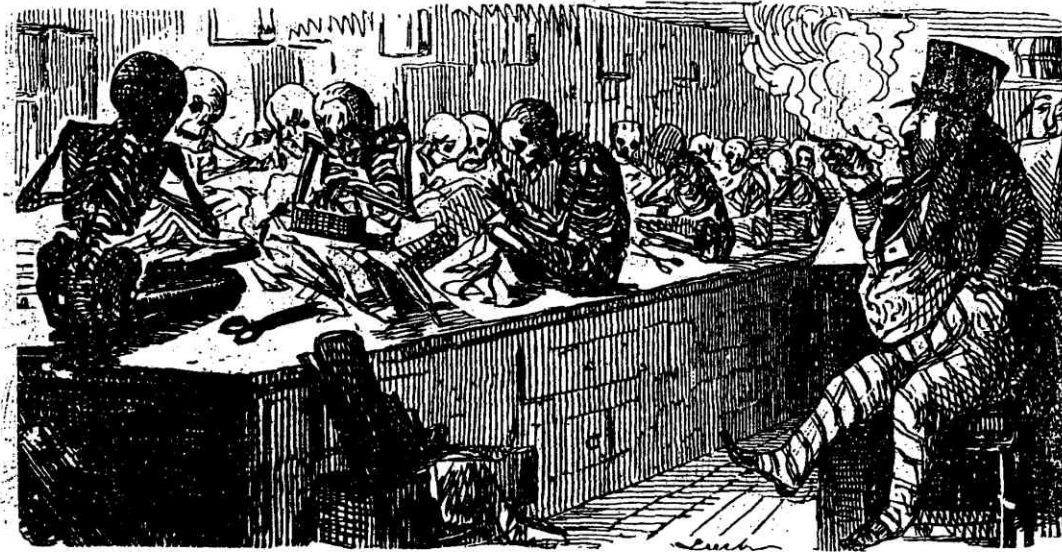
図 2

ができるはずである。」

アイキー・ソロモンズが世に聞こえた盗品故買人であったことは、先に述べたとおりだが、その嫌疑で捜索を受けそうになったとき、彼はジョーンズという偽名を使って逃亡を図ったことがあった。『パンチ』の文章はそのことを踏まえて、モーゼズ父子商会もいずれ同じことをやらかすであろうことを皮肉ったものだが、1850年代に彼らは事実マースデンズ社に、ハイラム兄弟商会はハルフォーズ社に、名称を変更した。ただし、それは悪事露見とは関係なく、両方とも上級市場へ進出するようになったからである。

ジョン・リーチはこのあと、それこそ一度見たら忘れられないほど肌寒くなるようなユダヤ人既製服仕立商人による搾取労働の光景を、1845年の「『パンチ』暦」に描いている（図3）。骸骨すがたの仕立職人集団を監視しながら葉巻きタバコを吹かしている資本家風のでっぷりしたユダヤ人が描かれているのである。「本年度のバブル——安物既製服」という見出しのついたキャプションには、次のような文章が添えられている。

服を買うならモーゼズ父子商会のものを。今をときめく仕立商だけあって、その



**Bubbles of the Year. Cheap Clothing.**

**THE LANGUAGE OF DOOR-KNOCKERS.**  
**RAT** signifies—Pots, Taxes, Paper, Duns, “D’ye want any apples?” Physic, the Dustman on boxing day, and Servants’ followers.  
**RAT-TAT** announces—the Postman, the Comical Cousin, and the “downy” Dun.  
**RAT-TAT-TAT**—is the signal of a Poor Relation, a Charity-tout, or a Bill of Exchange.  
**RAT-TAT-TAT-TAT-TAT-TAT**—indicates a Footman in full powder, the Polka-Professor, the Pet Parson, or the Chimney on fire.  
**RATTA-RA-TATA**—but no, a Gentleman’s knock cannot be described by the most ingenious phonography.

**APPROPRIATE BIRTHDAY GIFTS.**  
 The most appropriate birthday gifts are such things as nobody wants, or nobody would use. Velvet braces lined with satin, and embroidered

with butterflies, are the best adapted for any relative engaged in a light fancy business, as a South Sea whaler, &c. Painted French garters will do well for a grandfather with one leg in the grave; a silver-mounted riding-whip is likely to suit an uncle in the Navy; and a cocked-hat is just the thing for a friend who is a Quaker.

**CHEAP CLOTHING.**  
 Buy your clothes of Moses and Son, because they are fashionable tailors, and their cut is known; so that whatever article of dress you may have had from their shop will be recognised even by juveniles in the street, who will add to its popularity by crying after you, “that’s a Moses’ coat!” Another great point is the variety of clothes that you will get from frequent changing, for the coats of Moses run very fast to seed, as the flowers of fashion ought to do.

**TO SCICURES.**  
 “WHAT TO EAT—WHAT TO DRINK—WHAT TO AVOID.”—Turtle—Champagne—and “Ham Sandwiches a penny.”

図 3

仕立てぶりは有名である。その店で買った商品が何であれ、街の小僧たちでも一目で判り、「あっ、モーゼズの服だ！」と声をはりあげることによって、その商品の評判に花を添える。もう一つの特典は、服を頻繁に取り換えねばならないので、変化が楽しめることだ。つまりモーゼズの製品は、美しいファッション服同様、すぐに着られなくなってしまうのである。

『ジョン・リーチ——その生涯と作品』(1891)を書いたウィリアム・パウエル・フリスも言っているように、既製服仕立業者の中には、ユダヤ人に劣らないくらいに「搾取的」なキリスト教徒もいたはずである。にもかかわらず、ジョン・リーチがことさらにユダヤ人業者に的をしぼってこのような吸血鬼的な悪どさを描いている(第2巻30ページ)のは、その当時における『パンチ』のムードを代表しているといえよう。「ジョン・リーチやギルバート・アボット・ア・ベケットがユダヤ人社会に対して抱いていた愉快な偏見は、人情家のサッカリーだけでなく、〔ダグラス・〕ジェロルドにもある程度共通する特徴であって、疑いもなく当時の一般的感情のあらわれであった。」と、M. H. スピールマンは指摘している(『《パンチ》の歴史』1895、103ページ)。

しかし問題は、「愉快な偏見」の存在そのものではないか。スピールマンは、リーチが描いたようなユダヤ人に対する「憎悪は実はほんの表面的なことか、あるいは少なくとも、人間よりも習慣<sup>マナーズ</sup>に向けられたものであった」とつけ加えているが、これもまた語るに落ちる話である。この点を考慮に入れるとしても、ユダヤ人に対する偏見が、カトリック教徒やアイルランド人社会に向けられた偏見と同様、不条理なものであったことに変わりはないのである。

しかも話が政治的問題と絡んでくると、「愉快な偏見」ではすまされなくなってくる。例えば、1849年5月12日付の『パンチ』に掲載された「ミセス・ハリスの最後のスキャンダル断片」などは、1848年2月のフランス革命に際して、パリ市街にバリケードを築いた「危険な階級」とユダヤ人とを重ね合わせている点で、相当に深刻な問題をはらんでいる。

表題にいう「ミセス・ハリス」は、ディケンズの『マーチン・チャズルウィット』(1843-44)に登場するアル中の看護婦として有名な、ミセス・ギャンプの影の対話仲間だ。『パンチ』は彼女の口を借りて、1848年にパリで反乱を起こしたのはユダヤ人だと言わしめているのである。

「愚かにも『自由の旗』と名づけられた『革命旗』の正体は、ふだん着のポケットからフィールド・レーンの住人に渡った、すり取られたハンカチにほかならないし、『自由の帽子』は結局(中略)、ロンドンの大通りで、あの有名な「クロ！」を呼ばわりながら」商いをするユダヤ人古着商人の「帽子を何重にも重ねて固めたものだったのであ



る」。そして『パンチ』のページには、この「自由の帽子」の図とともに、パリに出現した「ホリーウェル・ストリート流のバリケード」と題する風刺画が描かれているのである。文中にある「フィールド・レーン」は、本稿冒頭に述べたフェイギンの巣窟があったサフロン・ヒルの一部をなすロンドンでの指折りの貧民街、そしてホリーウェル・ストリートは、すでに言ったとおり、ユダヤ人の古着商店街として知られるところだ。

1848年のフランス騒乱時にパリに築かれたバリケードを、ロンドンのユダヤ人古着商店街の古着の列に喩えているのは、連想としては面白いが、『パンチ』のこの記事の日付からみると、その根底には、明らかに政治的な意図が働いていた。ロンドンのユダヤ人群像を、パリ市街でバリケードの主演を演じた「不逞の」下層労働者と重ね合わせることによって、ユダヤ人の政界への進出を牽制しようとする狙いが、読みとれるのである。

### (3) 国会議員への道のり

では、その頃におけるユダヤ人の政界への進出の動きとして、具体的にどのようなことがあったのか。この問題について語るための手がかりとして、まず1851年7月26日付の『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』から「ユダヤ人問題」の一節を引くことにしよう。

下院は過去5回にわたって、英国のユダヤ人が英国の市民権行使の資格を有することを、大差をもって認定したが、上院は5回ともにこの提案を否決した。ロンドン・シティの有権者は、2回連続してユダヤ人を国会議員として選出、首都自治区グリニッチ選挙区民も一度はこの例に倣ったことがある。にもかかわらず上院は、すべてを無効として退け、過去の実績のみならず今後における成行きに如何にかかわらず、法的には統制権を発動し得ない集会において、この件についての意志決定を行っているのである。すなわち独自の宗教的誓約をもつ者として、「キリスト教徒としての真なる信仰」に基づく宣誓を拒むユダヤ人は、いかなる者といえども、キリスト教徒を代表する議員として指名されることがあってはならないということである。

ここで問題となっているユダヤ人というのは、ライオネル・ネーサン・ド・ロスチャイルド(1808-79)。1804年にロンドンに定着して以来、財閥としての地歩を固めたネーサン・メイヤー・ロスチャイルドの長男として生まれ、父とともにイギリスにおけるロスチャイルド銀行の経営に携わった人物である。

1847年の総選挙のときに、ロスチャイルドが、ジョン・ラッセルとともにロンドン・シティを代表するホイッグ党の国会議員として選ばれたことから問題ははじまった。国会議員として正式に議席に着くためには、先の新聞記事にもあるように、「キリスト教徒としての真なる信仰に基づいて」宣誓を行わねばならなかった。ロスチャイルドはユダヤ教徒として、この条件を受け容れなかったために、議席を得ることができなかったのである。

ユダヤ人の議員無資格問題をめぐっては、先の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の記事にも反映されているように、上下院が真っ向から対立していた。1830年以来1850年頃までに、下院は5回にもわたって、ユダヤ人のために宣誓の方式を変える法案を通過させたが、その都度上院はこれを否決、同じパターンがくり返されること前後10回目にして、1858年ようやく決着が着いた。ロスチャイルドの側からみれば、1847年の初当選以来11年目。その間補欠選挙を含めて総選挙が行われるごとにくり返し当選を果たし、遂に問題の「キリスト教徒としての」宣誓を唱えることなしに、下院議員の席に着くことができるようになった。すでに大物議員として活躍中だったベンジャミン・ディズレーリー、先程の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の記事にあったグリニッチ選出の国会議員、オールダーマン・サロモンズ（彼らはともにイギリス国籍を有していた）を含めると、3人のユダヤ人が国会に議席を占めることになったのである。

ところがここで明確にしておきたいのは、問題の「キリスト教徒としての」宣誓は、しきたりとして存在しているのであって、制定法としてあったのではなかったということである。したがって、時の首相ジョン・ラッセルがもしその気になれば、下院の決議に従って、ロスチャイルドの国会入りを認めることもできたはずである。しかしラッセルは、この問題の早期解決を図ることに腐心しながらも、宣誓制度に頑なに固執する上院の動きに配慮することを忘れなかった。将来に禍根を残すような強引な押しきりは、得策ではないと判断したがゆえに、彼は慎重な態度をとらざるを得なかったのである。

ユダヤ人の国会議員無資格制の早期撤廃を主張しつつづけていた『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』は、このような経緯を詳細に報じるとともに、ラッセル内閣の命運にかけても、ロスチャイルドの国会入りを早急に実現させるべきだと、気合いをかけた。なかでも1850年8月3日付の同紙に揚げられたユダヤ人問題に関する論説は、論調の積極性と具体性から見て、注目に値する。

この論説は、ユダヤ人がすでに参政権をもっており、現にロンドン・シティの有権者が、ロスチャイルドを国会議員に選出していることを重視、もし議員に課せられる宣誓が、立法府の非キリスト教化を防止するための策として行われているというのなら、それはもはや形骸化していることを指摘している。その「宣誓制度にもかかわらず、汎神

論者や無神論者の国会入りを防止することはできないであろう。(中略) たまに一人のユダヤ人議員が下院に席を占めたとしても、現状以上に、あるいは神を信ぜぬ者や似非キリスト教徒によってすでに生じているより以上に、国会の非キリスト教化の恐れがあるとは、誰一人として思わないであろう。」この実情に照らしても、宣誓制度は廃止されるべきだというのが、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の一貫した姿勢であったのである。

しかし、もともと意地悪な風刺を旗じるしとして掲げている上に、ユダヤ人に対して辛辣な態度をとってきた『パンチ』は、一向に和らぐ気配を見せていない。当面の問題と関連して、まず1847年4月10日号に載った「ディズレイリー氏の見解による下院風景」を見てみよう(図4)。

一見してわかるように、イギリスの国会がユダヤ人議員によって構成されていることを想定して描かれ1ページ大の風刺画——カートゥーンで、画家はやはりジョン・リーチ——である。重ね帽子と長いあごひげ、際立ったユダヤ鼻、ぼさぼさの頬ひげなどによって特徴づけられているユダヤ人議員たちと、彼らに語りかけるベンジャミン・ディズレイリーが描かれている。見たところではいかにもロスチャイルドの議員問題と関係



THE HOUSE OF COMMONS ACCORDING TO MR. DISRAELI'S VIEWS.

図 4

のありそうな絵だが、ロンドン・シティの選挙区から彼が選出されたのは、これより2か月あとのこと、したがってリーチがこの風刺画を描いたのは、実は全く別の動機からだったのである。

ディズレイリーが大物政治家であると同時に、小説家としても有名であったことは周知のとおりだが、『コニングズビー』(1844)、『シビル、または二つの国民』(1845)につづく彼の3部作最後の作品『タンクレッド、または新十字軍』がこの年の3月に出版された。『タンクレッド』は、ユダヤ民族の優越性とその栄光を讃えるために書かれた作品であったといってよい。「ディズレイリー氏の見解による下院風景」は、このことと関係があるのだ。

ディズレイリーは、1847年1月に召集された国会で最前列の議席を占める栄光を獲得するほどの出世をとげたが、政界でのその出世は、彼に向けられた偏見との戦いの過程でもあった。彼が旧約時代のユダヤ民族の栄光を精神的に蘇らせようとしたのは、その偏見を乗り越えて、超然たる姿勢を持するためでもあった。である以上、当然宗教的対立の問題を整理してかからないわけにはいかなかったのである。

ディズレイリーの神学的思想を要約するのは容易ではないが、『コニングズビー』以来の基本的な点をあげれば、まずはユダヤ人を原始キリスト教徒として位置づけていること、したがってキリスト教は、ユダヤ教を<sup>ダイヴィニティ</sup>変革させたものではなくて、それを完成させたものだという解釈を打出していることだ。そのような観点に立って彼は、キリストがダビデ王の末裔のユダヤ人であるという点を、その神<sup>ダイヴィニティ</sup>性よりも重視しているのである。

『タンクレッド』は、いわばこういったディズレイリーのユダヤ民族観と宗教観の集大成として書かれた作品であった。主人公タンクレッドは、最高の地位を誇るベラモント公爵家の御曹司だ。国会議員としての前途を嘱望する父親の期待をふり切って中近東に渡り、パレスチナ、エルサレム、シナイ山等の聖地を巡るなかで、彼はさまざまな神秘体験を通じて、上に述べたようなディズレイリーのドクトリンをくり広げる役割を果たすのである。なかでもタンクレッドと美しい神秘的なユダヤ人女性イーヴァとの間に交わされる宗教と教会に関する問答(第3編第4章)は、その核心部分を形成しているといえよう。

「わたしたちを迫害するなんて！ もしあなた方〔キリスト教徒〕が口でおっしゃるのを本当に信仰としてもっていらっしゃるのなら、わたしたちユダヤ人の前に跪くべきですわ！ あなた方は救国の英雄のためには銅像を建てますわね。わたしたちは人類を救いましたのよ。それに対してあなた方は迫害で報いておられるのです。」

という風にディズレイリーは、彼が最も訴えたかったことを、イーヴァに言わしめているのである。

しかし、このような非正統的なドクトリンがすんなり受け入れられるはずはない。『タンクレッド』は小説そのものとしても不評であったが、特にユダヤ人の優越性を主張したことで、『パンチ』を刺激する結果になった。小説が刊行されてからまもなく、「ユダヤ人のチャンピオン」（1847年4月10日）という題の辛辣をきわめた批評がその紙面にあらわれたのである。『パンチ』は『タンクレッド』を読んだ結果として、「ロンドンの街々を行商してまわるイスラエルの子孫」——すなわち古着商のユダヤ人を引き合いに出して、まず彼らの卑しさを槍玉にあげる。そしてディズレイリーが、彼の理念を国会に持ち込むことをねらっていると想定して、次のように論を進めるのである。

ディズレイリー氏が、モーゼ系の議会在ラグ・フェア（東ロンドンの古着街として有名——筆者）に誕生するまでは、彼の大使命の目的は達成されないと、心に決めてかかっていることは明白だ。（中略）ユダヤ人の中には、切れ者も確かにいるし、愛想がよくて有能な人間も大ぜいいる。しかしディズレイリーが、彼の愛する民族に従うことをわれわれに求めるのであれば、まずは彼らの不正行為を改めてからにしていだきたいのである。

改められるべき「不正行為」としては、安物の衣類、腐った果物、偽物の宝石等々をごまかして売りつけること、そしてユダヤ人弁護士の常習犯的ないんちき行為等々があげられている。古着商のほか、限られた選択の方法しかなかったユダヤ人の職業が、いかに彼らに対する偏見の原点となっていたかをよくうかがわせるのである。この風刺文と、先にあげた「ディズレイリー氏の見解による下院風景」とは対応関係にあって、当時におけるユダヤ人問題に関する『パンチ』の記事と絵として印象深く、これらに則して多くのことを読みとることができるのである。

#### (4) 重ね帽子を蹴とばして

それから2か月後、ロスチャイルドの国政舞台への登場により、ユダヤ教徒の宣誓問題が表面化してからも、『パンチ』は、常套的な古着商人だけでなく、シャイロックやフェイギンのイメージまで狩り出して、それをテーマにした風刺画を描きつづけた。そして政界の要人としてこの問題と深く関わり、それ以降さらに大きな政治的影響力をもつようになるディズレイリーに対する『パンチ』の風刺は、ますます辛辣の度を加えるようになる。顔を映し出すメディアのなかった時代におけるこのようなありさまを想像

してみよう。善し悪しにかかわらず、『パンチ』の図像を通じて、ディズレイリーは、国民に最もよく知られた顔となるのである。

1847年12月に開かれた国会で、ラッセルによってユダヤ教徒無資格制廃止についての動議が出されたとき、ディズレイリーがその支持のために全力をつくしたということは、言うまでもない。彼はそのときの演説の中で、あらためてキリスト教とユダヤ教との緊密な関係を説き、「ユダヤ教を信ずることなくして、キリスト教は存在し得ない」という『タンクレッド』以来の独自の論法を展開させた。<sup>4)</sup>

この破天荒の弁論は、国会をすっかり白けさせてしまったと伝えられるが、なかでもこれに対して強く反発したのが、オックスフォード大学選出の議員、サー・ロバート・ハリー・イングリズであった。イングリズは、ウルトラ級のプロテスタント信奉者で、国政につらなる者一人一人が純粋なキリスト教精神を保持しなければならないことを理由に、国会での宣誓制の廃止に対して、徹底抗戦の構えをもってこの国会に臨んでいたのである。1849年2月19日付の『パンチ』に描かれた「最後の口説き（ユダヤ教徒無資格制をなくすために）」（図5）は、この経緯を映したものとして興味深い。キャプションは、さらに「フランク・ストーン氏の絵画にあやかって」という断り書きがついている。

「フランク・ストーン」（1800-59）は、歴史画、肖像画を得意とし、ディケンズと親交があって、彼の『クリスマス・ブックス』最終編『つかれた男』の挿絵画家としても知られる。1843年に彼は、『最後の口説き』という題の油彩画を、ロイヤル・アカデミーに出品した。肺結核で衰弱しきった田舎の若者が、好きな美しい娘に切々と言い寄るけれども、つれなくはねつけられてしまうところを描いた作品である。

これをもとにして、ジョン・リーチは、「田舎の若者（the swain）の役割」を「ユダヤ教徒のジェントルマン」に当てはめ、言い寄る若者を拒む「つれない女」（the inexorable）の役割を、サー・ロバート・イングリズに当てはめて描き出したのである。先に言ったような理由から、左背景に「プロテスタント教会」という文字が映っているのも、お見逃しなきようご注意ください。ユダヤ人に対して偏見まる出しの絵を描いてきたリーチにしては、珍しく和らいだ雰囲気ユーモラスな作品である。

次に、ユダヤ教徒の国会入りに対して、断固として「ノー」を唱えつづけた、サー・ロバート・イングリズと関係のある『パンチ』記事（1847年12月25日）を、もう一つ紹介することにしよう。あたかも『パンチ』がユダヤ人の権利主張を代弁するような形で、イングリズあてに書いた書簡体の抗議文である。

ユダヤ教徒の有資格と無資格

サー・ロバート・イングリズに捧ぐ



### THE LAST APPEAL

(AGAINST JEWISH DISABILITIES).

BEING A GREAT LIBERTY TAKEN WITH MR. FRANK STONE'S PICTURE.

THE PART OF THE SWAIN - - - - - *By a Gentleman of the Hebrew Persuasion.*  
THE INEXORABLE - - - - - *By Sir Robert Henry Ingham.*

図 5

謹啓 ユダヤ人には脳がないのですか？ ユダヤ人には心身の働きが、思考力が、想像力、判断力、理性がないとお思いですか？ キリスト教徒と同じ法律によって治められ、同じ罰則に従い、同じ訴訟の対象となり、同じ裁判官と陪審員によって同じく恩典に浴する権利をもち、同じく有罪無罪の裁きを受けるのではないのです

か？ 税金を課せられて、納めないことがありましたか？ 租税を正金で払わないことがありましたか？ 絞首刑にかけられて死なないことがあるのでしょうか？ あなた方の行政に従うのであれば、私たちもそれに参加すべきではないのですか？ ほかのことであなたたちと同じであれば、この点だって同じではありませんか？

頓首再拝

—ユダヤ人より

ご存じシェクスピアの『ヴェニスの商人』第3幕第1場において、シャイロックがキリスト教徒に向かって述べる名せりふの核心部分をもじったものである。

イングリスの猛反対にもかかわらず、宣誓制廃止に関するラッセルの動議は、賛成233票、反対186票、47票の差で可決された。しかし上院での抵抗は根強く、問題の解決をみるまでには先ほども言ったように、それから11年の歳月を要した。1858年、両院がそれぞれ独自の宣誓方式を採用するという条件を盛りこんだリューカン卿の修正案が双方で採択され、下院においては、ユダヤ教にのっとった宣誓が認められて、初のユダヤ教徒国会議員が誕生するようになったのである。

『パンチ』（1858年7月24日）は、「パンチの国会要録」欄にさっそくこのことを取りあげた。そして上院が一方においてはユダヤ教徒の国会入りに反対を唱えながら、他方ではそれを許容した矛盾撞着ぶりを痛烈に皮肉ったあと、次のような文章をもってこれを締めくくっている。

ギャロウェー卿は、やがては「放蕩宰相」の誕生する日がくるであろうことを、強



図 6



い懸念をもって警告された。そうなれば、「多額の賄賂と引き換えに、ユダヤ人貴族の創設もなされるであろう」と。しかし、この懸念は上院議員諸卿になんら痛痒を感じさせるところとはならなかった。かくして法案は通過、イスラエルは欣喜痛快の思いで、ありったけの帽子を思う存分に宙に蹴り上げたのであった（図6）。

「パンチ国会要録」には例によって特有の辛口が感じられるが、添えられた挿絵は、いかにも1858年が、イギリスのユダヤ人にとって一つの転機となったことを象徴するような絵である。

#### 注

- 1) Edwin Pugh, *The Dickens Origins*, T. N. Foulis, 1913, p. 249, Lauriat Lane, Jr., "The Devil in *Oliver Twist*," *The Dickensian*, 1956, pp. 132-36 を参照。
- 2) Don Manuel Alvarez Espriella, *Letters from England*, 2nd ed. Vol. 3, 1808, p. 151.
- 3) "But in this case he [the Devil] did appear / Like a slop-merchant from Wapping / . . ."  
*Peter Bell the Third*, Part 2, 91-92.
- 4) 詳しくは、Monypenny & Buckle, *Life of Disraeli*, Vol. 3, 1914, p. 68 を参照。

#### 主要参考文献

- Altick, Richard D. "*Punch*," *The Lively Youth of British Institution 1841-1851*. Ohio State University Press, 1997.
- Blake, Robert. *Disraeli*. London: University Paperbacks, Methuen & Co., 1969.
- Cowen, Anne and Roger. *Victorian Jews through British Eyes*. Oxford University Press, 1986.
- Monypenny, William Flavelle and Buckle, George Earle. *The Life of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield*. London: John Murray, 6 vols., 1910-1920.
- Spielmann, M. H. *The History of "Punch"*. London: Cassell & Co., 1895.